みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Discussions and Conclusion : Conclusion

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大林, 太良 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003678

Ⅲ. 従来の研究と本研究の意義

大　林　太　良*

1. 世界大的な文化分類
2. 地域的な文化分類
3. 中間報告との比較

統計的手法を用いて東南アジアからオセアニアにかけての地域の文化を分類し，また要素クラスターを設定する試みとして，その範囲と規模においてわれわれの試みは最大のものといえるであろうが，これより先にすでにいくつかの注目すべき試みがおこなわれていた。そのなかには，最初から一定の地域の文化を分類し，あるいは文化複合を試定するためにおこなった研究もあれば，世界大的な文化分類の一部として東南アジア，オセアニアがふくまれているものもあり，また通文化的な因子分析において現れた因子が地域的な要素クラスターになっているものなど，さまざまである。

私は，これからこれらの研究を発表年代を追って検討するのでなく，まず他の研究者による研究のうち，世界大的分類の一環として東南アジア，オセアニア全域を蔽うものを検討し，つづいて地域的により限定された研究を，東南アジア，オセアニアの順で考察し，最後に1987年に発表した中間報告と今回の結果の異同について考えるという順序で論を進めて行きたい。

1. 世界大的な文化分類

世界大的な文化分類としては，ここではロマックス (Lomax, Alan) とバーコウィッツ (Berkowitz, Norman) の研究，ケニー (Kenny, J.A,) の研究，ステュワート (Stewart, R.A.C.) とジョーンズ (Jones, K.J.) の研究の三つを取り上げることにしたい。三者とも東南アジア・オセアニア地域における標本文化（民族）数は少なく，したがって分類としてもかなり大まかなものであって，われわれの試みとはかなり密度が異なることをあらかじめいっておきたい。

* 東京大学教養学部

アラン・ロマックスは，Cantomeric 共同研究ののち，ノーマン・バーコウィッツの協力を得て，「文化の進化的分類」という論文を発表した [Lomax and Berkowitz 1972]。これにはロマックスらの Cantomeric 研究で集められた資料 [Lomax 1968] にマードック (Murdock, G.P.) の『民族誌表録』[Murdock 1967] の資料を加えて，全世界的の137文化を因子分析して，13の主要地理的因子を設定した研究である。東南アジア，オセアニアに関しては，次の諸因子が挙げられている（番号は原著者のもの)。つまり，(6)オーストラリア採集民（オーストラリア，なお地図からみるとマレー半島の Semang も入っているらしい)。(9) メラネシア（ニューギニア，メラネシア，ミクロネシアのブタ飼育栽培民，南米の Timbira と Bora Witoto も入る。) (10) ポリネシア＝太平洋（ニューギニアの Motu 族，東部ミクロネシア諸族，ポリネシア諸族を含む太平洋の航海民)。(11) 原マレー（インドシナ丘陵からボルネオ，フィリピンへの稲作民の拡大を示す)。(12) 古高文化（中東から東はインド，東南アジア，インドネシアに及ぶ，都市，帝国，灌漑施設，工芸専門化を特徴とする高文化)。なお，かれらは元来 148 文化を分析したが，そのうち 4 文化はどの因子にも入らず孤立していたが，その一つは Miao であった。また台湾の Sadek は，(8) 黒色アフリ

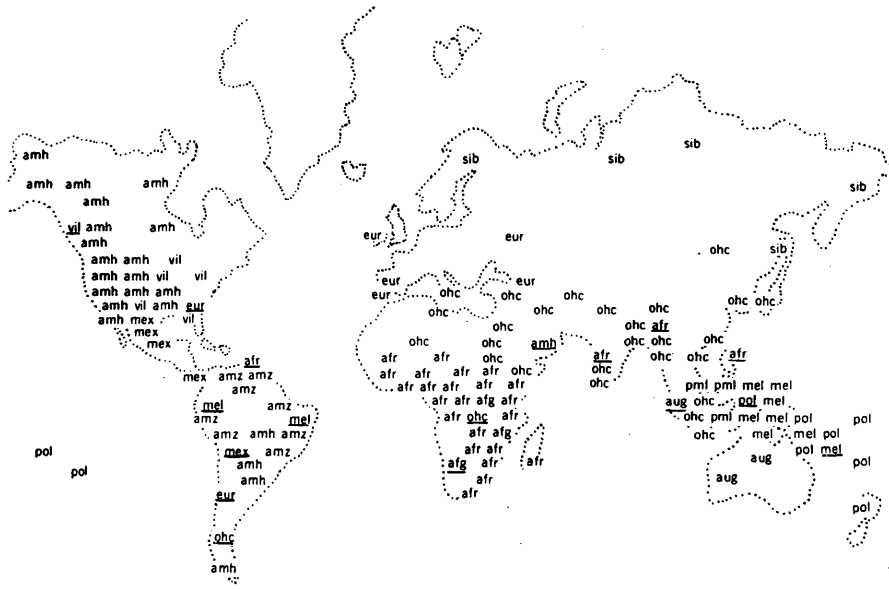

Fig. 1. Factor identification of 137 cultures located geographically (approximately) by the appropriate abbreviation. The following are abbreviations for the factors: afg, African Gatherers; afr, Black Africa; amh, American Hunters; amz, Amazonia; aug, Australian Gatherers; eur, Europe; pml, Proto-Malay; mel, Melanesia; mex, Mexico; ohc, Old High Culture; pol, Polynesia; sib, Siberia; vil, American Villagers. Underlining indicates that the culture is an exception to the geographic continuity rule.

図1　ロマックスとバーコウィッツの世界文化分類図
[Lomax and Berkowitz 1972, Fig. 1]

表1　ロマックス・バーコウィッツ分類A

ロマックス・バーコウィッツ	文化クラスター	
6. オーストラリア採集民	II–B–ii	オーストラリア＝残余亜群
8. 黒色アフリカ	I–A–i	台湾亜群
	I–A–ii–b	ナガ=モンタニャール=小スンダ区分
	I–B–ii–b	亜中核区分
9. メラネシア	II–B–i	メラネシア亜群
	II–A–i	ミクロネシア亜群
10. ポリネシア・太平洋	II–A–ii	ポリネシア亜群
11. 原マレー	I–A–ii	アッサム＝縁辺島嶼亜群
	I–A–ii–a	フィリピン＝ボルネオ区分
12. 古高文化	I–B	東南アジア高文化群

表2　ロマックス・バーコウィッツ分類B

ロマックス・バーコウィッツ	文化クラスター
6. オーストラリア採集民	因子1弱群
8. 黒色アフリカ	因子6強群
9. メラネシア	因子1弱群
	因子3弱群
10. ポリネシア・太平洋	因子2強群
11. 原マレー	因子6弱群
12. 古高文化	因子2弱群

カ農耕民に分類されている。なお，地図によれば，マダガスカル原住民やアッサム山地民（らしい）もアフリカ農耕民に入っている。[Lomax and Berkowitz　1972: ことに Fig. 1, p. 232]。（図1）

この論文は全体的にみて，かなり説得的な分類と思われるが，各因子に属する文化（民族）の一覧表も示されておらず，詳細な検討をおこなうことができない。一応，われわれのクラスター分析の結果と表1に示すような対応関係にあるといってよかろう。またこれをわれわれの文化の因子分析の結果と対比すれば表2に示すような対応関係になる。

このように，ロマックスとバーコウィッツの分類は，われわれの文化のクラスター分析，因子分析の結果とも，かなりよく合っている。しかし，いくつかの相違や問題点もある。

(1)　東南アジアとオセアニアという大きな2分法は出ていない。

(2)　文化の因子分析であるから論文に発表された形にまとめられる前には，おそらく少なくとも若干の因子には対照的な対をなす強群と弱群があったと思われるが，

それが示されていない。

(3)　文化（民族）の標本数が少ないから，分類は大まかであり，またもしも標本数がふえれば上記の因子でこの地域の文化のすべてを蔽えるか否かは問題であろう。

(4)　東南アジア（マダガスカルをふくむ）の栽培民が，黒色アフリカ因子と原マレー因子に2大別されているのが注目される。これはいいかえれば，前者は単系的（ことに父系的）社会，後者は双系的社会を表わしている。つまり社会組織に偏ったマードック資料に大きく依存した結果であろう。

マードックの『民族誌表録』にもっぱら依拠し，これにクラスター分析を試みたのは，ケニー [1975] である。彼は『民族誌表録』の全民族（文化）ではなく，その5分の1の243民族をクラスター分析した。ただし，樹状図の形にはまとめないで，0.50の相関係数と0.35の相関係数という二つのレベルにおける分類を発表している。

表3　ケニーによる東南アジア・オセアニア文化分類

Group I　Foragers	(II–Group 1)
a.　Tasmanians, Tiwi, Groote Eylandt	(I–Group 1)
b.　Subanun, Yami, Kubu	(I–Group 29)
Group II　Micro-Polynesians	(II–Group 2)
a.　Marquesans, Makin, Tahitians, Tongans, Simboese	(I–Group 2)
b.　Kapingamarangi, Ifaluk, Ulithians	(I–Group 20)
c.　Dani, Tikopia	(I–singleton)
Group III　Assam-Melanesian	(II–Group 4)
a.　Lifu	(I–Group 10)
b.　Mogh, Lakher, Chin, Ao	(I–Group 25)
c.　Seniang, Mafulu, Koita, Abelam, Keraki	(I–Group 26)
d.　Motu	(I–singleton)
Group IV　Indonesian	(II–Group 6)
a.　Toradja, Tobelorese	(I–Group 16)
b.　Ami, Rhade	(I–Group 35)
Group V　Kurtatchi	(II–Group 7)
a.　Kurtatchi	(I–Group 5)
Group VI　Balinese	(II–Group 8)
a.　Balinese	(I–Group 13)
Group VII　Madagascar	(II–Group 9)
a.　Tanala, Sakalava	(I–Group 12)
Group VIII　Cambodians	(II–Group 10)
a.　Cambodians, Khmer	(I–Group 18)

前者（STAT-COR 群）は，35群とどの群にも入らない一匹狼的民族が20からなり，後者（STAT-10 群）は，10群に分かれ，一匹狼的民族は一つだけである。つまり前者は後者のなかの細分になるという関係にあり，樹状図ではないが，両者を組み合わせてみると，東南アジア・オセアニア地域について，前ページのような分類にまとめることができる（表3）。ケニーは別に群に名称をつけていないが，便宜上，大群（STAT-10 群）については，私が名称をつけておいた。

マードックの『民族誌表録』のように，社会組織と経済形態についての指標をコードの大部分とする資料をクラスター分析（あるいは因子分析）した場合，そこに得られる結果は，歴史的・地理的要因のあまり反映していない，社会・文化類型である。そして，世界大的な分類をおこなうときには，大陸にまたがった群がしばしば現れるのは不思議ではない。ロマックス・バーコウィッツの分類においても，メラネシア群に南米の2民族が入り，アッサム，台湾，マダガスカルの諸族が黒色アフリカ群に入っていたが，この種の現象はケニーの分類，ことに大分類（STAT-10 群）では，さらに顕著に見られる(図2)。したがってケニーの分類とわれわれのクラスター分類とを比較するのは，ケニーの標本数があまり少ないこともあって，あまり適当とおもわ

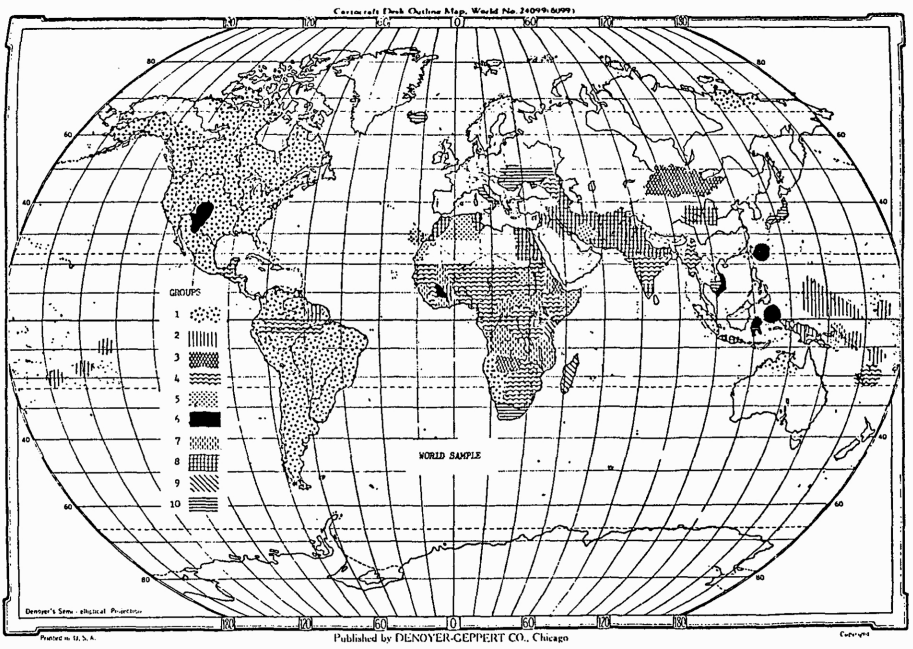

図2　ケニー STAT-10 群分布図
[KENNY　1975 の map]

れない。そこで，ここでは両者の対照表を示すことはしないが，ただ若干の気がついた点を摘記すると，

(1)　ケニーの場合も東南アジアとオセアニアという2大別がみられない。

(2)　オーストラリア採集民，ミクロネシア，ポリネシアなどという群が，われわれの場合と同様に認められる。

(3)　アッサムとメラネシア諸族が一つの大きな群にまとまり，かつそれはアフリカ農耕民を主体とする群（STAT-10群名中の第4群）である。これは，単系（父系）的な未開農耕民ということで，このような分類になるのであろう。

(4)　ところが，ロマックス・バーコウィッツの場合と違い，マダガスカル住民が民族数は少ないが独自の群をつくっているのが注目される。

(5)　インドネシア群は，Toradja, Tobelorese のクラスターと Ami, Rhade のクラスターに分かれている。おそらく，前者は双系栽培民，後者は母系栽培民ということであろう。母系的な栽培民といってもメラネシアの Kurtatchi は別の群をなしている。私は，上の第3章V．考察の節で，東南アジアとオセアニアとに別々の母系的文化群が，将来検出されるかもしれないという可能性を考えたが，ケニーの結果はこのような予想を強めるものである。

(6)　ケニーの分類において，東南アジア高文化諸族のうち，Balinese が Cambodians や Khmers（前者は現代のカンボジア人，後者は周達観が記録した13世紀のクメール人）とは別の群に属していることが面白い。つまり，Balinese は，中近東，インド，中国などの住民と同一群に入り，Cambodians, Khmers はヨーロッパ諸族や日本人と同じ群に入っている。これも，いいかえれば，前者は父系群，後者は双系群ということであろう。

このようにしてみると，ケニーの分類は，地域的な分類としては，あまり適切でなく，かつ出自のような特徴に引きずられて，分類が文化全体をうまく反映していないのではないかという疑いが大きい。母系群のように，示唆的な例もあるが，全体として地域的文化分類としては，ロマックス・バーコウィッツ分類ほど適切でなく，またわれわれの分類のほうが，はるかにすぐれているといえよう。しかし，これはマードック資料を世界大的に分類したために，ことに欠点が目立ったのであって，もしも東南アジア，オセアニアに標本を限って分類したら，もう少し伝統的な文化領域の区分に近いものが出来たかもしれない。しかし，それもまたあまり期待できないことは，マードック資料による北アメリカ原住民文化の分類が，かなり不満足なものであったことからもほぼ予想がつく（第3章I．の冒頭を参照）。

表4　熱帯雨林文化
[STEWART and JONES　1972: 57–58]

Factor Three: *Tropical rain forest culture*

A. Highest loaded items

1. *Positive*
   (i) Malayo-Polynesian linguistic affiliation (704)
   (ii) Tropical rain forest (703)
   (iii) Subsistence by horticulture (577)
   (iv) Gift exchange to obtain wives (544)
   (v) Pig husbandry (534)
   (vi) Food supply secure (502)
   (vii) Games of skill (484)
2. *Negative*
   (i) Cereal crops (–566)

B. *Highest factor scores*

1. *Positive*
   Trobriand (IG02, 3.473, 8S 151E)
   Marquesans (IJ03, 2.379, 9S 140W)
   Lesu (IG04, 2.170, 3S 153E)
   Wogeo (IE04, 2.028, 3S 144E)
2. *Negative*
   Siriono (SE01, –2.029, 16S 64W)
   Venda (AB06, –1.909, 23S 30E)

東南アジア，オセアニア全域にまたがる研究としては最後にステュワートとジョーンズのものを挙げることにしよう。テクスター (Textor, Robert) の『通文化要約』[TEXTOR　1967] に集成整理された厖大な通文化的相関関係に，ステュワートは因子分析を試み，[STEWART　1971]，その要約をジョーンズと連名で発表した [STEWART and JONES　1972]。彼等はそのなかで，因子1≪構造的複雑度≫，因子2≪父親中心家族≫というような12の因子を抽出した。それらは必ずしも一定地域と深く関係しているものばかりではないが，われわれの対象地域に関しては，因子3≪熱帯雨林文化≫(表4)，因子6≪職業によって決定される地位≫(表5)の二つが重要である。つまり，前者はオーストロネシア語族のオセアニア語派とむすびついており，後者は東南アジア大陸部の高文化に関連しているのである [詳細は大林　1985b を参照]。

この結果をわれわれの文化要素の因子分析の結果と比較すると，その因子1がことに注目される。つまりその強群が，東南アジアの稲作金属器文化ないし高文化，弱群がオセアニアの根栽栽培民文化とほぼ対応しているからだ。ただし，その東南アジア稲作金属器文化の代表者には，大陸部ばかりでなくて，島嶼部の文化も入っているこ

表5　職業によって決定される地位
[STEWART and JONES　1972: 59–60]

Factor Six: Status as determined by occupation

A. Highest loaded items

1. *Positive*
   - (i) Class stratification based on occupational status (745)
   - (ii) Large state is level of political integration (636)
   - (iii) City present (623)
   - (iv) Hierarchy of national jurisdiction has 3 or 4 levels (568)
   - (v) Plow present (471)
   - (vi) Located in Southeast Asia (461)
2. *Negative*
   - (i) Medical client highly hampered from returning to normal social roles (–539)
   - (ii) Marriage commonly or occasionally polygynous (–479)

B. *Highest factor scores*

1. *Positive*

   Thai (EJ09, 3.555, 15N 100E)
   Vietnamese (EJ04, 3.522, 17N 107E)
   Burmese (EI03, 2.371, 20N 95E)
   Korean (ED01, 3.073, 35N 102E)
2. *Negative*

   Lamba (AC05, –1.633, 13S 28E)

と，オセアニア根栽栽培民文化は，オーストロネシア語族ばかりでなくパプア諸族も入っている点が相違している。他方において東南アジア高文化における大陸部と島嶼部の分離，オセアニアにおけるパプア系諸族とオーストロネシア系諸族の分離の傾向は，われわれの文化のクラスター分析の結果と対応する側面をもっている。

以上，世界大的な規模における文化の分類，因子の抽出というこれらの研究は，いずれもわれわれの研究と比べるとキメが粗いが，全体としてわれわれの成果を支持する性格のものである。またわれわれの文化樹状図に明瞭に表われていない東南アジアにおける父系栽培民文化と双系栽培民文化との区別，母系栽培民文化の設定の可能性，オセアニアにおけるオーストロネシア語族オセアニア語派共通文化の設定の可能性など，極めて興味深いものがあり，それの一部はわれわれの因子分析の結果と対応を示しており，今後の問題の展開に大きな刺激と示唆を与えるものであろう。

2. 地域的な文化分類

地域的な分類については，東南アジア大陸部からオセアニアへという順序で，五つ

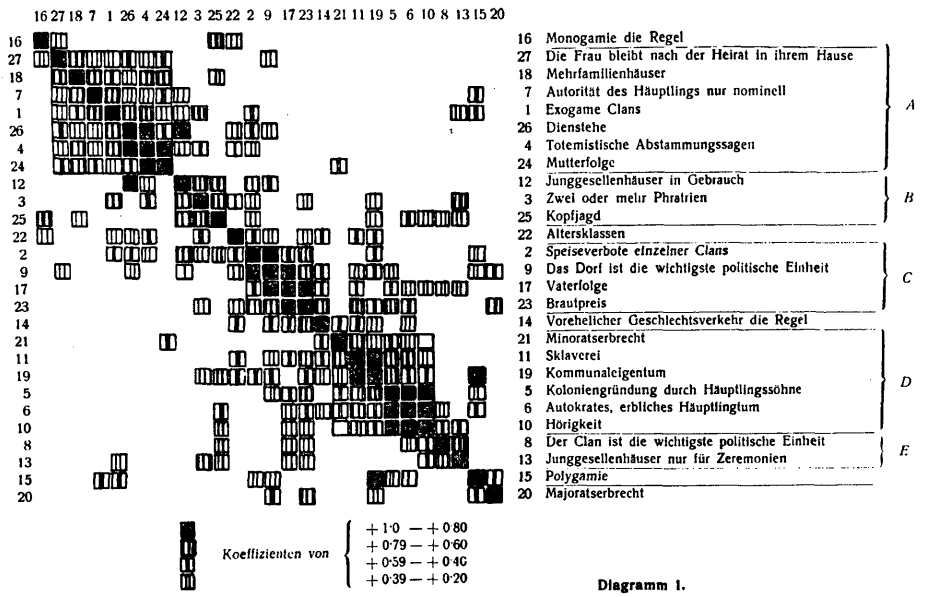

図3　フューラー＝ハイメンドルフによるアッサム文化要素群
[VON FÜRER-HAIMENDORF　1934: Diagramme 1] による

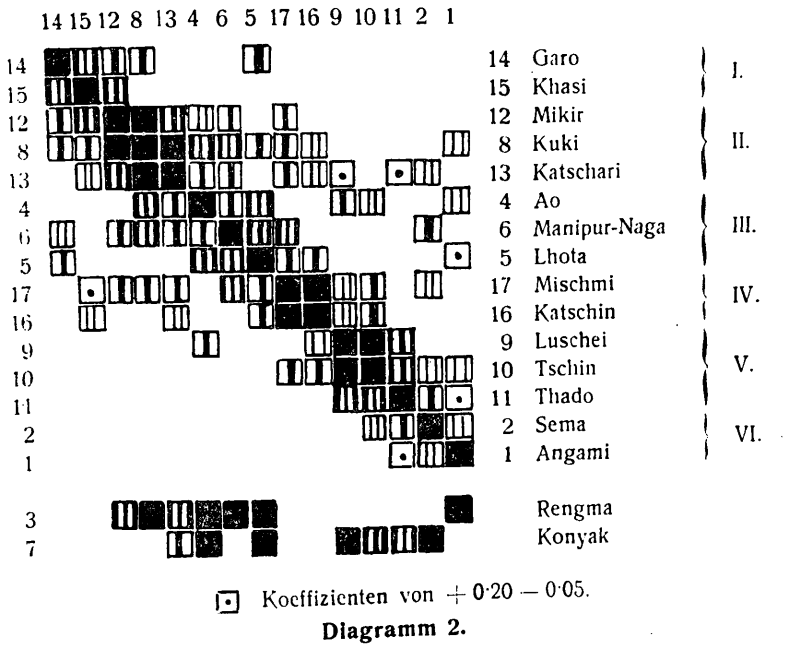

図4　フューラー＝ハイメンドルフによるアッサム文化分類
[VON FÜRER-HAIMENDORF　1934: Diagramme 2] による

の研究をとりあげよう。

第1はアッサム，北ビルマに関してのフューラー=ハイメンドルフ (von Fürer-Haimendorf) の研究である。東南アジア，オセアニア地域における文化の統計的分類としては先駆的なものの一つで，17種族につき，主として社会組織に関する27項目の資料を統計的に処理し，A～E という五つの文化要素群を取り出した [von Fürer-Haimendorf 1934] (図3，図4)。その5群のそれぞれを，われわれの結果と比較することは困難だが，独裁的世襲首長制，末子相続，奴隷制，共同体的土地所有，隷民を特徴とし，Lushai, Thado, Chin を代表者とするD群は，われわれの文化の因子分析における因子6強群，また文化要素の因子分析でも因子6強群に対応しおり，アッサムの父系階層社会群の存在は，このようにしてさまざまな方法で確認されるのだ。また妻方居住，多家族家屋，名目的な首長の権威，外婚氏族，労役婚，トーテミズム的出自神話，母系氏族などを特徴とし，Garo と Khasi を代表とするA群は，われわれの研究に対応するものをもたない。しかし，これもまた東南アジアには，将来母系クラスターが検出されるのではないかという予想を強めるものである。

第2の研究は，ロウティル (Routil, R.) のものである。ロウティルは，フューラー=ハイメンドルフの研究に触発され，かれが提出した資料を別の数式を用いて計算し直して，三つの大きな文化群にまとめた（表6，表7，図5)。大ざっぱにいうと，フューラー=ハイメンドルフのA群はロウティルのI文化に，B, C, E 群がII文化に，そしてD群がIII文化に相当する。このうちI文化とIII文化については，いま述べたことと重複するので，II文化についてだけいうと，ナガ諸族を主な担い手とし，父系外婚氏族制，氏族禁食，テリトリー，土地所有，政治の単位としての村落などを特徴としている [Routil 1936]。

フューラー=ハイメンドルフの分類と，ロウティルの分類とを比較してみると，27という僅少な要素数にもかかわらず，フューラー=ハイメンドルフが5群を区別したのは，あまりにも細かに分け過ぎてしまい，2～3の要素しか特徴としない群をつくり出すようなことになっている。したがってロウティルの分類にも対応物をもつA, Dの両群は別として，B, C, E の3群の区別がどこまで成功しているかは問題である。結論的にいって，ロウティルの分類のほうが，アッサム，北ビルマの民族＝文化の分類としては，より成功しているといえよう。

ただ，ここで一言しておく必要のあるのは，項目数が少なく，しかもその多くが社会組織にかかわるものであるにもかかわらず，かなりもっともな分類が行われえた理

表6　ロウティルによるアッサム3文化群
[ROUTIL 1936: 248]

I	II	III	Nr. der Elemente
im Nordwesten:	im Zentrum:	im Süden:	
Khasi (Mon-Khmer), Mikir (Naga-Mikir), Garo und Katschari (Bodo)	Nagastämme Katschari (Bodo)	Kuki-Tschinstämme	
monogame Ehe	öfters Polygamie	monogame Ehe	15 16
Heirat in das Haus der Frau	die Frau zieht zum Mann	die Frau zieht meistens zum Mann	27
nur Dienstehe kein vorehelicher Verkehr	teils Dienstehe, teils Brautpreis; teilweise vorehelicher Verkehr	nur Brautpreis vorehelicher Verkehr	14 23 26
Mehrfamilienhaus	kein Mehrfamilienhaus	kein Mehrfamilienhaus	18
bei Khasi und Garo weibliche, bei Katschari und Mikir männliche Erbfolge	nur Vaterrecht	nur Vaterrecht	17 24
nur nominelle Häuptlingsautorität	meist nominelle Häuptlingsautorität	meist autokrates, erbliches Häuptlingstum	6 7
keine Koloniengründungen	bei Sema und Lhota Koloniengründungen	Koloniengründungen durch Häuptlingssöhne	5
keine Sklaverei und Hörigkeit	bei Sema Hörigkeit, bei Ao und Lhota Sklaverei	Sklaverei, zumindestens Hörigkeit	10 11
nur bei Khasi Kommunaleigentum	Kommunaleigentum	fraglich	19
weder Dorf noch Clan spielen eine politische Rolle; Ausnahme der Mikir	Dorf ist die politische Einheit, ausgenommen bei Angami	meist das Dorf die politische Einheit	8 9
exogame Clans bei fehlenden Speiseverboten, doch teilweise vorhandenen totemistischen Abstammungssagen. Bei den Garo Phratrienbildung	exogame Clans mit clanbedingten Speiseverboten, meist ohne totemistische Traditionen, jedoch Phratrienbildung	keine exogamen Clans, Fehlen von Speiseverboten, totemistischen Traditionen und Phratrienbildung	1 2 3 4
bei Mikir und Garo Junggesellenhäuser	meist allgemeine, zumindestens aber zeremonielle Verwendung von Junggesellenhäusern	mit Ausnahme der Luschei keine Junggesellenhäuser	12 13
bei Khasi Minoratserbrecht; aber kein Majoratserbe	teilweise Minorats-, teilweise Majoratserbrecht	im Süden Minorats-, im Norden Majoratserbrecht	20 21
	nur bei Ao Altersklassen		22
bei Garo Kopfjagd	allgemeine Kopfjagd	meist Kopfjagd	52

表7　ロウティルによるアッサム文化分類
[ROUTIL　1936: 249]

Sprachen \ Kulturen	I	II	III
Mon-Khmer	Khasi		
Bodo	Garo (Katschari)	Garo (Katschari)	(Katschari)
Naga-Mikir	Mikir (Manipur)	alle Nagastämme	(Angami, Sema, Ao)
Katschin		Katschin	(Katschin)
Nordassam		(Mischmi)	(Mischmi)
Kuki-Tschin	(Kuki)	(Kuki)	Luschei, Tschin, Thado

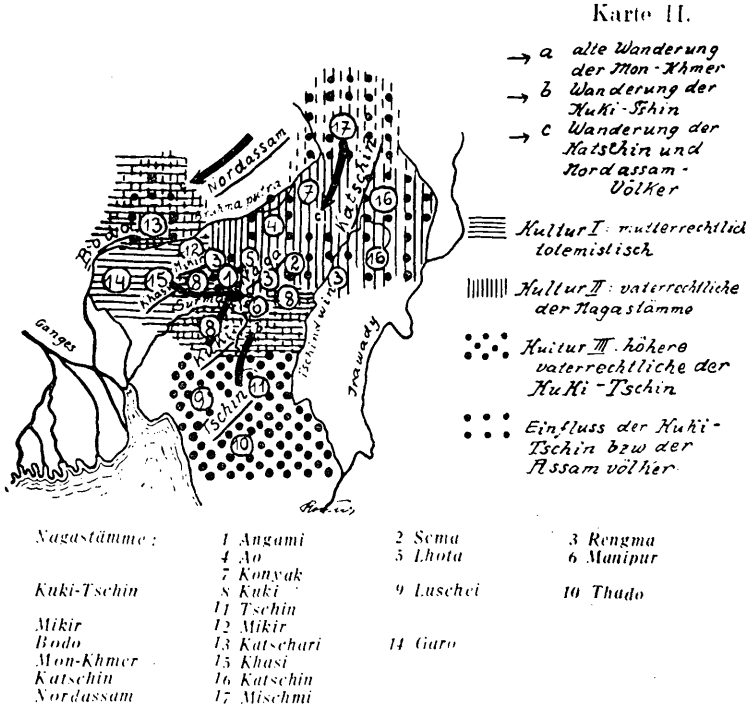

図5　ロウティルによるアッサム民族移動図
[ROUTIL　1936: 249]

由である。私の考えでは，これはフューラー＝ハイメンドルフの項目選定が，この地域の社会組織の本格的な文献研究を基礎として，この地域にうまく合った，つまり，この地域の文化諸群の指標となるのに適した要素を選んでいたからであろう。

第3の研究は，マレー半島から東南アジア島嶼部にかけてのわれわれのパイロット

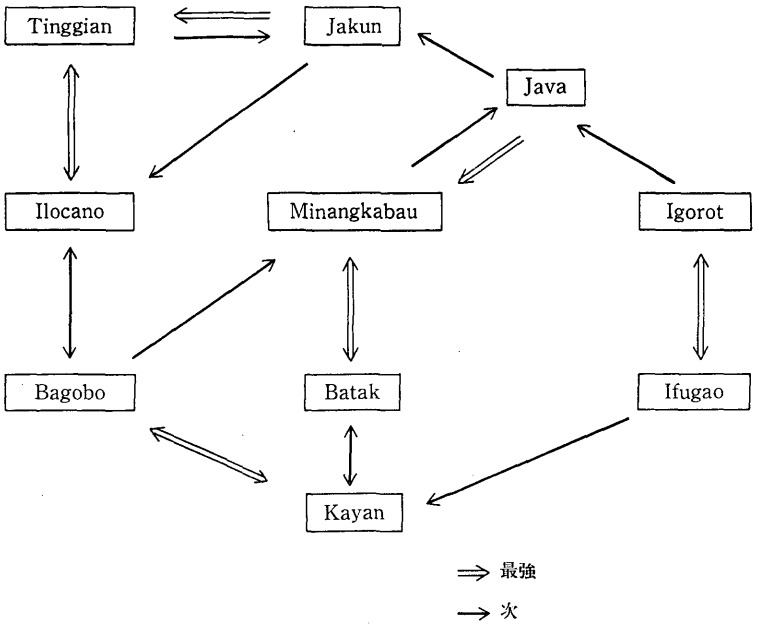

図6 強結合関係図
[大林・杉田 1984: 図1]

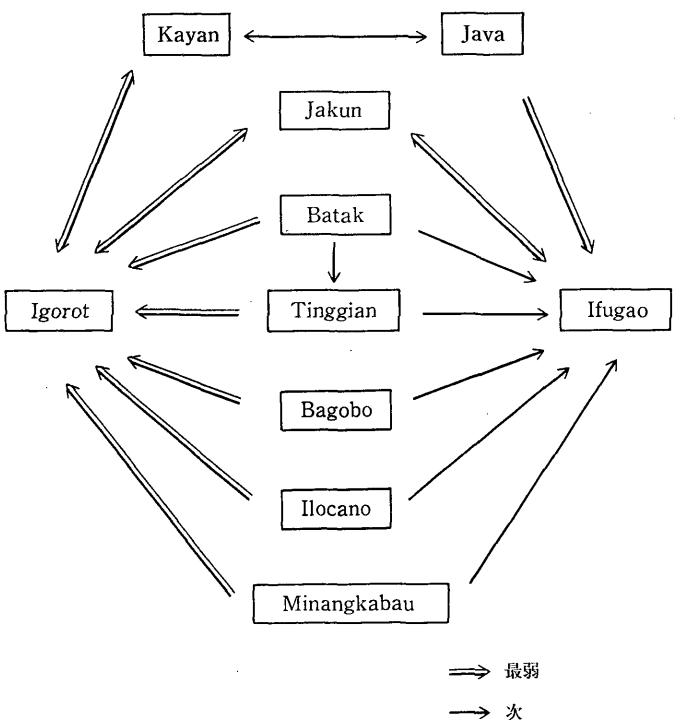

図7 強結合関係図
[大林・杉田 1984: 図2]

・スタディである。これは，コール (Cole, Fay Cooper) [1945] が，その著『マレーシアの諸民族』の附録として，この地域の10民族，80文化要素の対照表を発表していたが，これにもとづき（不備な点の多い Javanese のところは関本照夫が補った），分析したものである。

民族（文化）間の関係をみると，強結合において，西部インドネシアの3民族が近い関係にある。つまり Minangkabau がかたや Batak，かたや Javanese と極めて近い関係にある。このいわば高文化的3民族の群を間にはさんで，フィリピン諸民族は，一方では Igorot-Ifugao 群，他方では Tinggian, Ilocano-Bagobo 群の二つに分かれる観を呈している（図6）。また弱結合からみると，Jakun, Batak, Minangkabau の諸族が，Ifugao, Igorot の両族と極めて遠い関係にある。また Ifugao-Igorot 群が，他のフィリピン諸族 (Bagobo, Tinggian, Ilocano) から遠い関係にある（図7）[大林・杉田　1989: 47–49]。

その後，本報告書原稿執筆のため，コールのデータによる文化間関係も，杉田は樹状図の形にまとめた（図8）。それによると，いま述べたことにつけ加えたいことは，第1に Ifugao—Igorot 両文化が1群をなして，他の諸文化と分かれており，その限りでは，東南アジア島嶼部諸族中，やや特異な地位を占めているらしいこと，第2に Jakun, Ilocano, Tinggian と Kayan, Bagobo, Java, Batak, Minangkabau とは

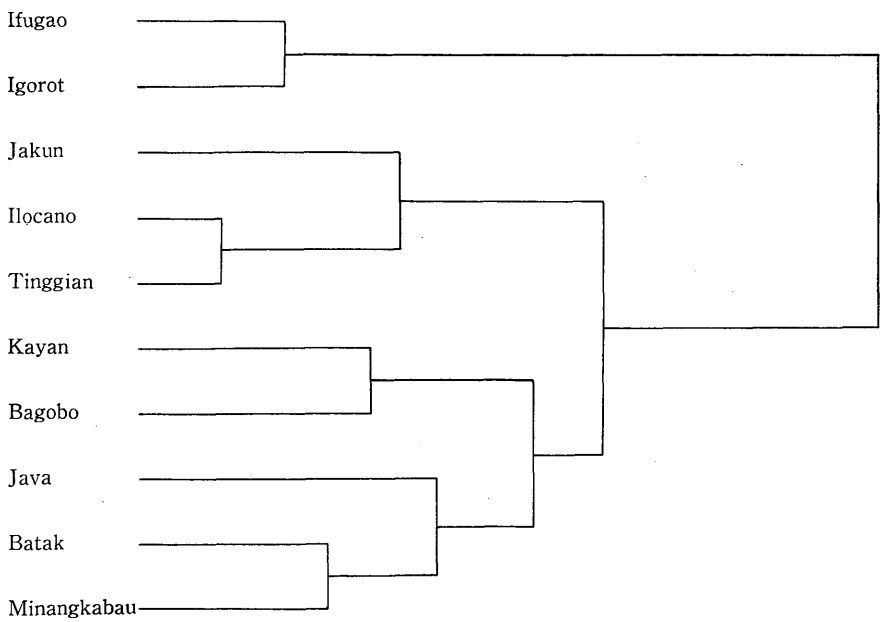

図8　コール資料の樹状図

別の1群をなしていること，第3に Kayan と Bagobo の群と，Java と Batak と Minangkabau の群が認められることである（図8）。

このうち，Minangkabau, Batak, Javanese が1群をなすという結果は本報告における文化の樹状図とは大きく相違するが（樹状図では，3者はバラバラに別のクラスターに属している），東南アジアの文化史を考えると，西部インドネシアにおけるヒンズー的影響を蒙った高い文化として1群をなすのは，決して不思議でなく，かえって首肯される点が多い。しかし，われわれの文化の因子分析，文化要素の因子分析においても，これにピタリと対応する群は見出されなかった。

またフィリピン住民中，Ifugao, Igorot 両族が他のフィリピン住民，たとえば近くの Tinggian とも大きく相違するという結果も，まして島嶼部において特異な群をなすことも，本報告の樹状図には見られず，そこではすべて I–A–ii–a フィリピン＝ボルネオ区分に入っているのである。

私の印象をいえば，コールの作製した項目表は，彼が調査し，親炙しているフィリピン山地民内部の区分に適したものであるため，Ifugao—Igorot 群と他のフィリピン諸族との距離が拡大して描き出され，これに反して高文化的特徴をあまり項目表中に採用していないため，西部インドネシアの3民族が，いわばその基層文化の親近性のために，1群にまとめられているように思われる。つまり，コールの資料の分析の結果は，われわれの成果とは相違するところがあるとはいえ，それなりに，島嶼部東南アジアの文化構成を考えるうえで示唆に富んでいる。

つぎに，文化要素間の関係をみると，標本の10民族すべてに焼畑耕作とマレー式革鞴も分布しており，すでに鉄鍛冶技術を伴なった焼畑耕作が，これら10民族の文化の基層をなすという示唆をうける。また，若者宿（若者部屋）ないし男子舎屋，試験婚，祖先彫像，神話的存在の彫刻を特徴とする若者宿複合というべきものの存在が，Igorot, Ifugao, Kayan, Minangkabau, Batak の諸族にみられる［大林・杉田 1984: 49–50］。これらの結果もまた，われわれの成果では少なくとも明瞭な形で出ていなかったものであって，島嶼部文化史への貴重な見通しを与えてくれる。

つぎにオセアニアに関して，ミルケ (Milke, Wilhelm) の『東南メラネシア』［Milke 1935］をとりあげよう。Santa Cruz, New Hebrides, Banks, Torres 諸島，New Caledonia, Loyalty 諸島の26民族の物質文化と社会組織についての261要素を統計処理し，秘密結社文化層とトーテム文化層という2大文化層をとり出し，また地域的区分としては，A群 (Banks, Torres 諸島)，B群，(Maewo, Aoba, North Pentecost)，C群 (Espiritu Santo, Malo)，D群 (Malekula, Ambrym, South Pe-

ntecost, Epi), E群 (Erromango, Tanna, Aneityium), F群 (New Caledonia, Loyalty 諸島) の6群を区別した (図9)。

ところで，ミルケの秘密結社文化層は，40要素からなり，そのなかには，貝製ビーズ頸輪，ブタ牙腕輪，切妻屋根，脚つき・脚なしの木鉢，膝折着柄の貝斧，ブタ飼育，カヴァ，こん棒，弓矢，材木太鼓，母系双分制，秘密結社，仮面舞踊，祖先像などを含んでいる。またトーテム文化層は，陰茎鞘，腰蓑 (女性)，円形家屋，直角はめこみ着柄斧，槍，世襲首長制，父系出自，父方居住，トーテミズム的出自信仰，集団的成年式，割礼，などを含んでいる。

じつは，この成果は当時の学者にとって予想外のものではなかった。というのは，このミルケの秘密結社文化層とトーテム文化層は，それぞれグレープナー (Graebner, F.) の双分制文化とトーテミズム文化 [GRAEBNER 1909] に対応しており，グレープナーの見通しを，東南メラネシアという限られた地域に関して確認しているからであった。

われわれの文化樹状図では，東南メラネシア諸族は，Santa Cruz (II–A–ii–a 西ポリネシア区分) を除いて，すべてメラネシア亜群中の島嶼部区分 (II–B–i–b) に含められている。ただし，そのなかでは，Pentecost, New Caledonia, Malekula, Banks はそれぞれ別の小クラスターに分属しているのは，ミルケの成果と対応するといえないこともないが，われわれの場合，この地域の民族数も少なく，また東南アジア・オセアニアという広大な地域全体の分類をおこなっていなるため，ミルケの成果とは，かなり様相が異なっている。

また，グレープナー，ミルケの設定した2大文化層については，われわれの文化要素クラスターには，これに対応するものがない。これは，われわれの項目表が，メラネシア内部での文化の細分には適していないのに，ミルケやグレープナーは，とくにメラネシアの分析にとって指標となる要素を選んでいる結果であろう。

ただ，可能性として考えられることは，もしもわれわれの資料でも，オセアニアの分だけあるいはメラネシアのものだけ取り出して計算し，樹状図を作ったならば，あるいはミルケが示した東南メラネシアの地域区分とか，グレープナーやミルケが想定した2大文化層も現れてくるかも知れない。さきにもオセアニアを東南アジアと切り離して計算し分類し直す作業の必要性を説いたが，ここにもそれを必要とする例があるように思われる。

ミルケの研究は，地域的に限られているが，項目数も多く，かつ徹底的で緻密な文献研究にもとづいているので，東南アジア，オセアニア地域における文化の統計的分

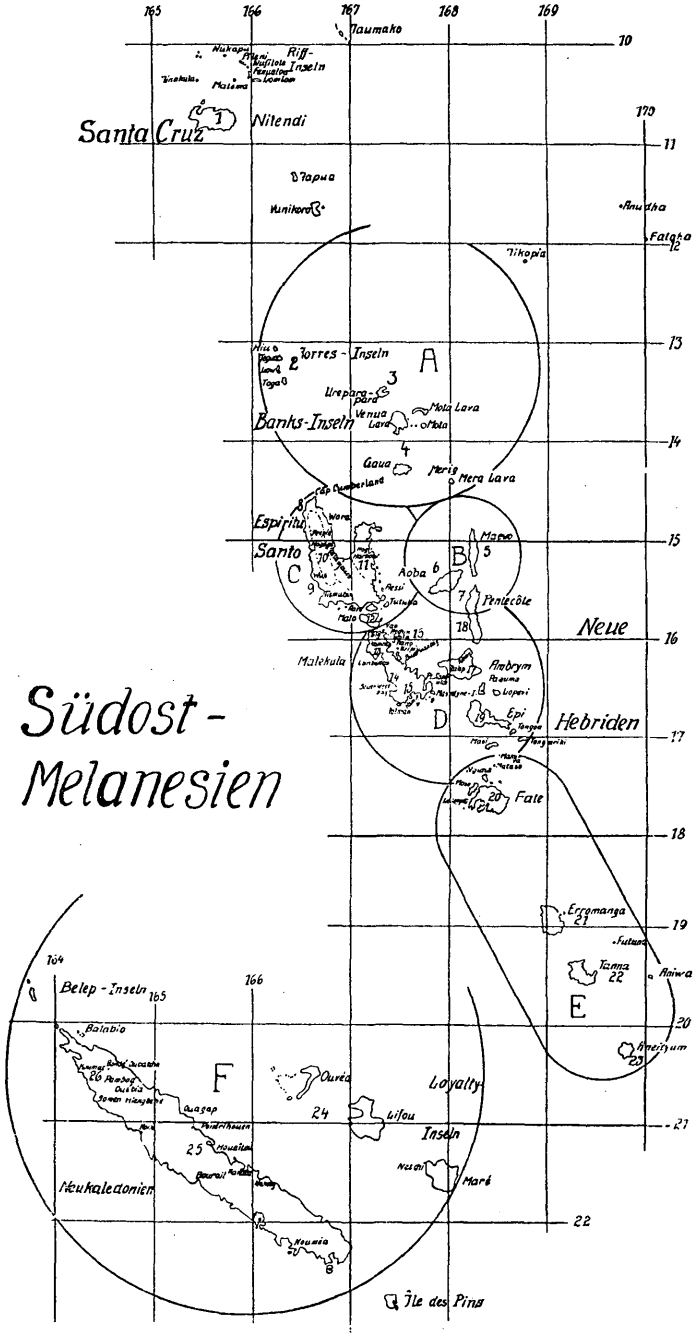

図9　東南メラネシア文化領域区分
[MILKE　1935: 46]

類の試みとしては，質的に最高のレベルにあるといって差し支えない。したがって，彼が提出した仮説は，けっして無視できない重要なものなのである。たとえば，2大文化複合ないし文化層については，すでにグレープナーが統計的方法によらないで，提出した仮説と基本的に一致する結果を出していることからみて，この2大文化複合の東南メラネシアにおける存在は，極めて高い蓋然性をもつと考えてよかろう。それだけに，われわれの資料ないし，また他の資料による追試がこの2大文化複合をまた証明することができるか否かに，大きな学問的興味が在するのである。

オセアニアに関して取り上げる第2の先行研究は，ドライヴァー (Driver, H. E.) とクローバー (Kroeber, A. L.) によるポリネシア文化の分類である [Driver and Kroeber 1932: 220–225]。これは，リントン (Linton, Ralph) が試みたポリネシアにおける物質文化の分布研究 [Linton 1923] にもとづき，統計的に分類をしてみたものである。ここでは，ポリネシアの6島嶼群相互の関係が問題になっており，ドライヴァーとクローバーは，はじめこれを Samoa-Tonga 群，Marquesas-New Zealand 群，Tahiti (Society)-Hawaii 群の3群に分け，Tahiti が Samoa—Tonga, Hawaii, Marquesas と結びつく枢要な地位をしめると考えた。(分類 I と仮によんでおこう)。

つぎにドライヴァーとクローバーは，各島嶼群間の simple proportion values を算出し，その結果，さきの見通しを少し変更し，まず基本的な Tahiti—Marquesas—Hawaii 群を認め，New Zealand は主として Marquesas を通じてこの群と関連し，Samoaは Tahiti を通じてこの群につらなり，最後に Tonga は Samoa 経由でこの群と関連するという結果を出した。分類 II とよぼう。

ドライヴァーとクローバーのポリネシア諸文化の分類は，Easter や Mangaia とか Ellice など多くの重要な島嶼ないし島嶼群を入れず，ただ上記の6島嶼群だけを取り扱っているので，ポリネシア文化の分類といっても極めて不完全なものであり，そればかりでなく，物質文化だけを材料にしているので，その意味でも文化分類として不充分である。しかし，それにもかかわらず，ポリネシア文化の専門家が作った要素分布一覧表にもとづいている点，項目の選定，有無の確定などにおいて，当然地域専門家の強味が見られるはずである。したがって，それにもとづいたドライヴァーとクローバーの分類も，無視できないものである。

かれらの成果をわれわれの結果と比べてみよう。われわれの樹状図は，彼等の分類と部分的に合致し，部分的に相違している。つまり彼等が取り上げた6島嶼群のうち，

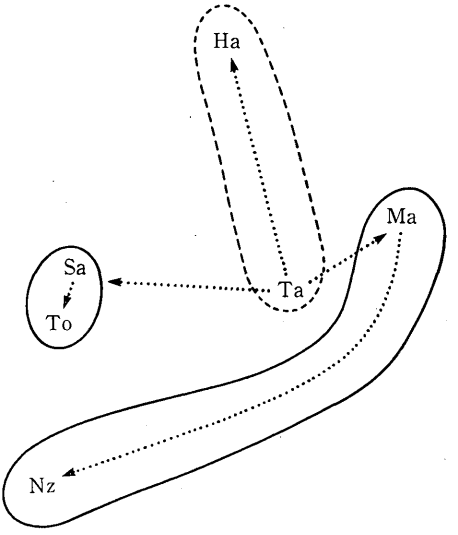

図10　ポリネシア諸群島間関係図
[Driver and Kroeber　1932: Fig. 1]

Tonga がメラネシア＝オーストラリア群のメラネシア亜群島嶼区分 (II–B–i–b)，つまりメラネシア島嶼部諸文化と同じ部類に入っているのを除き，他はすべてミクロネシア＝ポリネシア群のポリネシア亜群に入る，という点がまず相違している。さらにポリネシア亜群のうち，西ポリネシア区分 (II–A–ii–a) には，Samoa と Hawaii が入り，東ポリネシア区分 (II–A–ii–b) には，Marquesas, New Zealand, Society が相近接して入っている。

ドライヴァーとクローバーの分類 I，II ともに Samoa と Tonga が近い関係にあり，Hawaii は Tahiti と近い関係にあるが，それはわれわれの分類では出てこない。他方，われわれの Marquesas, New Zealand, Society 3 者の近い関係は，ドライヴァーとクローバーの分類 I では，Marquesas—New Zealand については認められ，分類 II では，Society (Tahiti)—Marquesas については認められている（図10)。

ドライヴァーとクローバーの研究では，ポリネシアの 6 群島しか対象にしておらないのに対し，われわれは東南アジア・オセアニア全体という枠組のなかで，かつポリネシアについても，はるかに多くの群島や島を対象にして，それらの相互間の関係を考えているのであるから，ある程度の相違が出てくるのは当然である。それを考慮に入れれば，われわれの Marquesas, New Zealand, Society を 1 群とみなし，それ以外に Samoa と Hawaii，さらに Tonga を認めるという分類にも首肯しうる点がある。また，Tonga がメラネシア島嶼群中に入っているのも，有りうべきことであろ

う。ただ，Samoa と Tonga を遠く引きはなし，Samoa と Hawaii が比較的近い関係におく，われわれの樹状図は，この二つの点に関しては，疑問符をつけてよい。

以上，私は世界大的あるいは地域的な先行分類について検討して来た。その結果を要約すると，

(1)　本共同研究のように世界大的でもなければ，狭い地域の分類でもない，その中間の規模の地域を対象とした文化分類は，やはり独自の意義と価値をもち，この中規模地域内部の文化の分類にもっとも適している。つまり，小地域の分類を集めても，東南アジアから，オセアニアにかけての地域全体の文化の大勢は明らかにできないし，また世界大的な分類，ことにマードックの *Ethnographic Atlas* のデータにもとづく分類の結果は，この問題の中地域の分類としては極めて不充分である。

(2)　それにも拘らず，マードック資料による世界大的分類は，東南アジアにおける母系複合の指摘など，われわれの結果にはない，興味深いものがあり，将来の研究のための一つの示唆を提出している。

(3)　小地域にもとづく分類は，コールの資料をわれわれが分析した結果にも現れているように，局地的な隣接文化の相違を，釣り合いを失して誇張する危険もあるものの，フューラー=ハイメンドルフやロウティルのアッサム，北ビルマの文化群分類，ミルケの東南メラネシアの研究，さらにこの3者よりも限定された程度において，ドライヴァーとクローバーのポリネシア文化の分類は，それぞれ小地域の，専門家による資料・項目の選定の強味が発揮されており，われわれの分類では出なかった，しかも，もっともなグルーピングを出している。これはその地域にうまく合った項目の選定と，個々の民族（文化）における文化要素有無の判定の信頼度の高さという地域専門家の強味が発揮された結果であろう。

したがって，われわれの分類で妥当性が高いのは，一般的にいって，上位のレベル，つまり巨大群，群，亜群あたりまで，あるいはその下の区分ぐらいまでであって，亜群ないし区分から下のレベル分類は，当該小地域に合った項目表によるより専門的な分析のほうがより高い妥当性をもつであろう。

3. 中間報告との比較

前にも述べたように，中間報告においては，東南アジア・オセアニアから150民族を選び，100文化要素の有無について分類をおこなったのに対し，今回の報告では237

民族，343要素の資料にもとづく分類である。中間報告と本報告との間には，たんに，民族数，項目数の相違ばかりでなく，質にかかわる相違がある。

その一つは，中間報告では，たとえその文化は存在していても民族誌的報告に記入されることが少ない惧れがあったり，また親族呼称の型のように記入には解釈が必要で，したがって誤りや記入漏れの可能性のあるような項目を除き，ワークシートへの記入の信頼性の高い項目を選んだ。また民族についても，記入項目数が多く，したがって，一般的にいって記入状態がよい民族に限られていた。これに反して本報告では，記入状態に問題があるか否かを問わず，提出されたワークシートの項目と民族をすべて利用して資料とした。

したがって，その限りにおいては，中間報告のほうが精選した資料で分類しているために，より信頼できる体系が期待できることが考えられる。しかし，じつはかならずしもそう簡単にいえない事情がある。

つまり，その2として挙げるべきは，中間報告は，インド・太平洋先史学者会議に間に合わせるため，という時間的な制約のため，ワークシート記入における誤りの検査，入力が正しく行われているか否かの検討をしてなかったことである。これは当然，若干の不正確さの原因となった。これに気づいたのは，中間報告においてTrobriand諸島民が台湾原住民と同じクラスターをなしていることに疑問をもったからである。そこで，中間報告がおこなわれた後，1987年秋に，ワークシート記入，入力の適切であったか否かの検討をおこない，Trobriandについての入力の誤りを始め，気づいた誤りを正したデータが，本報告において利用されている。したがって，本報告のほうが，資料の質としてすぐれている面もあるのである。

第3として挙げたいことは，中間報告において項目数を思い切って100項目に限ったことは，一方では信頼できる資料の比率を高める利点があるとともに，他方では項目数が少ないために，文化全体を適切に表わしえないという憾みが生じた。つまり，文化によっては，その文化内容により，また記入状態にもよるが，場合によっては100項目中のごく一部，たとえば10とか20という少数の要素で分類がおこなわれ，しかもその項目も当該文化にとってとくにその特徴をよく表わすとは限らないものである，という事態がおこりうるのである。

したがって，この点において，少数項目にもとづく中間報告は，歪んだ像を提出している危険を含んでいるといえる。

以上の一般的，抽象的な比較を念頭において，これから具体的な文化樹状図の結果の比較に進むことにしよう（表8，表9）。

表8 東南アジア・オセアニア文化樹状図—中間報告—
[OBAYASHI 1987: Fig. 1]

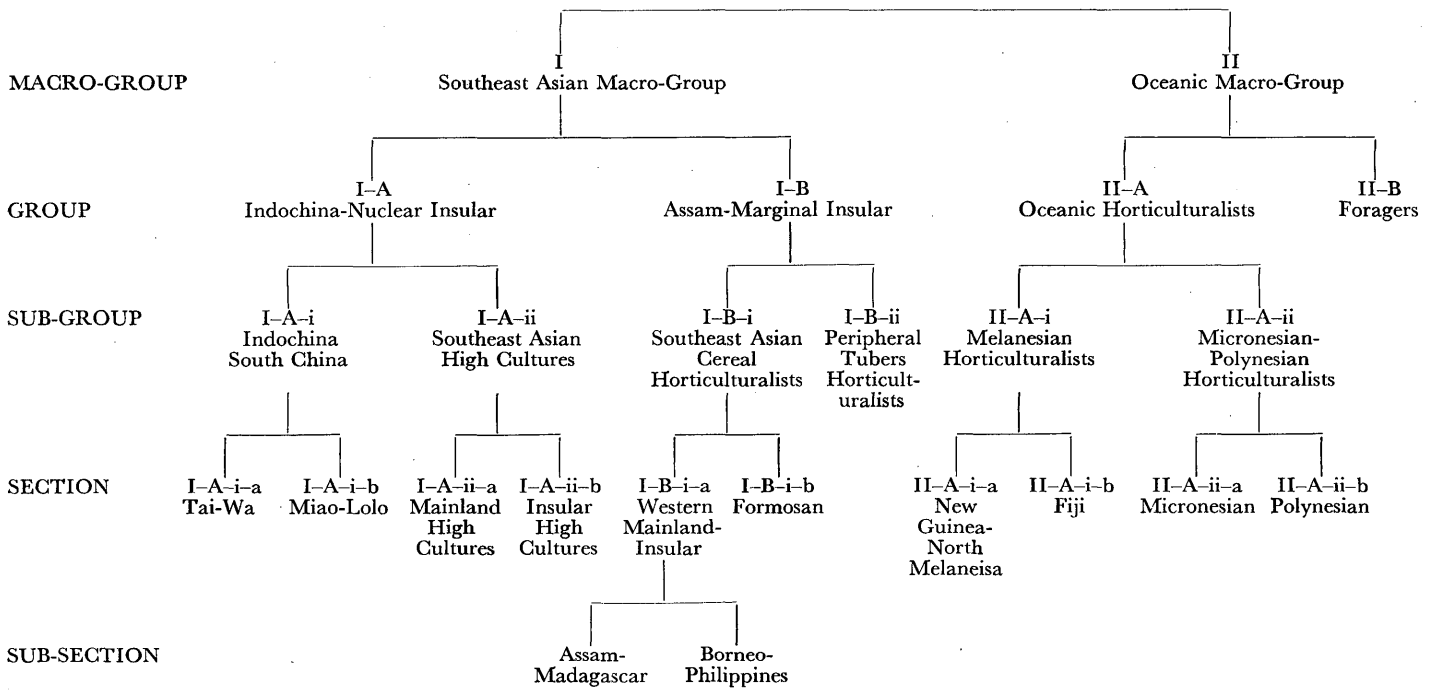

表9　東南アジア・オセアニアの150文化の分類 [OBAYASHI 1987]

I. Southeast Asian Macro-Group
  A. Indochina-Nuclear Insular Group
    i. Indochina South China Subgroup
      a. Tai-Wa Section
        Sumbanese, Wa, Li, Khmu, Jinuo, Kedang, Jarai, Tai Lu, White Tai, Black Tai, Manggarai, Katu//Palaung, Shan, Pai, Muong, Akha
      b. Miao-Lolo Section
        Yao in Laos and Thailand, Yao in Guandong, She, Puyi, Guizhuo Miao, Nu, Lisu, Pulang//Sichuan Miao, Hunan Miao, Nashi, Apa Tani, Miao in Laos and Thailand
    ii. Southeast Asian High Culture Section
      a. Mainland High Culture Section
        Mon, Burmese, Vietnamese, Negri Sembilan Malay, Cambodian, Sundanese, Acheh//Minahasa, Kelabit
      b. Insular High Culture Section
        Balinese, Toba Batak, Javanese//Makassarese, Bugis
  B. Assam-Marginal Insular Group
    i. Southeast Asian Cereal Horticulturalists Subgroup
      a. Western Mainland-Insular Cereal Horticulturalists Section
        [Assam-Madagascar Subsection] Lhota Naga, Ao Naga, Konyak Naga, Rengma Naga, Sema Naga, Thado-Kuki, Angami Naga, Lakher, Dafla, Lushai, Chin//Mahafaly, Tanala
        [Borneo-Philippine Subsection] Karen, Cak, Dusun, Bagobo, Mandaya, Lamet, Hanunoo, Eastern Toradja, Ifugao, Southern Toradja, Bontok Igorot//Land Dayak, Iban, Kayan, Tulung, Garo
      b. Formosan Section
        Saisiat, Bunun, Trobriand Islanders, Rukai, Paiwan
    ii. Peripheral Tubers Horticulturalists Subgroup
        Wemale, Mentaweian, Waropen, Faiwolmin, Yimar//Aru, Babar, Nias
II. Oceanic Macro-Group
  A. Oceanic Horticulturalists Group
    i. Melanesian Horticulturalists Subgroup
      a. New Guinea-North Melanesia Section
        [Papuan Subsection] Watut, Gidra, Asmat, Purari, Nimo, Iwam, Enga, Malekula, Dani, Miriam, Mabuiag
        [Austronesian Subsection] Rossel Islanders, Orokaiva, Motu, Sentani, Dobu, Manus, Baegu, Lau(Malaita), Kwaio, Abelam, Kwoma, Wogeo
      b. Fiji Section
        Rotuma, Lau (Fiji), Viti Levu
    ii. Micronesian-Polynesian Horticulturalists Subgroup
      a. Micronesia Section
        Satawal, Woleai, Namoluk, Ulithi, Truk, Ifaluk, Majuro//Owa Raha, Baining
      b. Polynesia Section
        Mangareva, Marquesas, Austral, Hawaii, Southern Cook, Tokelau, Kapingamarangi, Yap, Gilbert, Rennell, Maori, Pukapuka, Tongareva, Rakahanga//Niue, Ponape, Futuna, Samoa, Anuta, Ontong-Java, Easter Islanders
  B. Foragers Group
        Tasmanian, Groote Eylandt, Moken//Walbiri, Ungarinjin, Murngin

(1)　中間報告も本報告も，東南アジア巨大群とオセアニア巨大群に二大別される点では共通している。

(2)　群のレベルにおいては，東南アジアに関しては，インドシナ＝中核島嶼部群とアッサム＝辺境島嶼部に2分され，地域別分類の傾向が強いのに反し，本報告では，東南アジア穀物栽培民族と東南アジア高文化群に分かれ，むしろ内容的ないし文化の段階に応じた分類になっている。これはどちらももっともな分類であって，その限りでは甲乙をつけ難い。

東南アジアについて，その下の亜群のレベルに下りてみると，今度は逆に中間報告のほうが文化内容による区別の傾向が強く，本報告のほうが地域的分類の傾向が強い。つまり，中間報告では，インドシナ＝核島嶼部群に，インドシナ＝華南亜群と，東南アジア高文化亜群に分かれ，他方，アッサム＝辺境島嶼部は，東南アジア穀物栽培民亜群と周辺根栽栽培民亜群に分かれる。これに反し，本報告においては，東南アジア穀物栽培民群は，台湾亜群とアッサム=周辺島嶼部亜群に分かれ，他方，東南アジア高文化群は，大陸部＝華南亜群と中核島嶼部に分かれる。

約言すれば，群と亜群というレベルの相違はあっても，両報告で繰り返し同じようなクラスター（たとえば東南アジア穀物栽培民）が現れるのである。また本報告の亜群のレベルでは台湾亜群が現れるが，中間報告では，亜群の下の区分のレベルで台湾区別が登場する。したがって，レベルがどうであるかを別とすれば，これらいくつかのクラスターの存在は，中間報告と本報告とで，たがいに確認し合う結果になっているといってよい。

ここで注目しておきたいことは，中間報告において，周辺根栽栽培民亜群が設定できるのに反し，本報告では，どのレベルでも東南アジアにはこのクラスターが認められないことである。この点については，中間報告のほうが，本報告よりも面白い結果を出しているといってよい。

(3)　オセアニア巨大群の内部をみると，中間報告は，オセアニア栽培民群と採集民群に2大別され，さらに前者はメラネシア栽培民亜群とミクロネシア＝ポリネシア栽培民群に分かれるが，採集民群は別に亜群をもたない。これに反して本報告では，まずミクロネシア＝ポリネシア群とメラネシア＝オーストラリア群に分かれる。そしてミクロネシア＝ポリネシア群は，ミクロネシア亜群とポリネシア亜群とに分かれ，他方，メラネシア＝オーストラリア群は，メラネシア亜群とオーストラリア＝残余亜群に分けられる。

この2分類を比較してみると，本報告において，オーストラリアとメラネシアが1

群として成立している点は面白いが，亜群レベルまでについては全体的にみて，中間報告の分類のほうが，より明快であり，オセアニアの文化分類として適切であると思われる。つまり採集狩猟段階と，農耕段階をまず区別し，それから地域別の分類が進むという仕方は，極めて合理的に見える。

(4) このように，亜群のレベルまでに関しては，中間報告の分類のほうが本報告の分類よりも，よく出来ているという印象を私はもっている。

それは主として記入状態が不安定な項目，民族誌的情報の少ない文化を除外した結果，このようなスッキリした分類になったのであろう。反対に，これら不適当な資料もすべて包合した本報告では，オセアニア巨大群において，オーストラリア残余亜群というようなクラスターが出来，その残余区分には，東南アジアの根栽栽培民諸文化と並んで，情報が不足あるいは欠陥のあると思われる一連のミクロネシア・メラネシア諸文化がまとめられるという結果を生じている。

(5) 区分以下のレベルにおいても 中間報告におけるメラネシア栽培民亜群中のフィジー区分など興味深いものもあるが，逆に本報告のほうがよく出来ていると思われる例が出てくる。それはポリネシア諸文化のなかの細分である。つまり，ポリネシア民族学における顕著な事実は，文化が東西の2群に大きく分かれる傾向を示していることであって，このことは，バローズ (Burrows, E. G.) の研究によってよく知られている [Burrows 1938: 1940]。

それでは，われわれの研究においても，このような事実は認められたであろうか？

中間報告においては，ミクロネシア，ポリネシア亜群のなかにポリネシア区分が設定されたが，このポリネシア区分は，その内部が東西の両群に分かれる傾向を別に示さなかった。私は，これはわれわれの100要素の選択の仕方にもとづく結果と考え，次のように記した。

「100要素は数としては，〔東南アジア・オセアニアという大地域についての文化〕分類の大細には充分であろうが，詳細な分類には不充分である。同じことが，要素の選定についてもいえる。選定された要素はこの広大な地域の諸文化の大分類には適しているが，特定の小地域の細かい分類には適していない。そのために，その地域にとってもっと特徴をつかまえることができるような別のリストを作製する必要がある」[Obayashi 1987: 161–162]。

それでは，343要素というより多くの要素にもとづいた，本研究の結果はどうであろうか？ ポリネシア亜群は，西ポリネシア区分と東ポリネシア区分に2分されており，一応東西両群の区分があらわれでたことは，中間報告に比して大きな前進である。

おそらく，これは要素数が増え，そのなかにはこのような細分に役立つ要素もいくつか含まれていたためと解釈してよかろう。

それにもかかわらず，今回の東西両群も，完全に満足のいくものではない。たとえば，西群中に Hawaii と Tuamotu が入り，東群中に Ellice と Ponape が入っていることを見ても，不充分なことは明らかである。特定地域の細かい分類のためには，その地域に合った別の文化項目表を必要とする，という中間報告に示した見解は，今回もやはりある程度あてはまるものである。

(6)　もう一つの例は，中間報告におけるマダガスカル諸族の位置づけである。つまり，中間報告においては，Mahafaly, Tanala の両族がマダガスカルを代表していたが，西部大陸部＝島嶼部穀物栽培民区分のなかのアッサム＝マダガスカル区分に入っていた。ということは，マダガスカル諸族は，インドネシア西部から移動していき，言語的にもオーストロネシア語族に属するにもかかわらず，インドネシア諸族よりもむしろアッサムのなどの諸族と極めて近い関係にあるというのである。しかし，中間報告においても，同じデータを因子分析に用いた結果では，マダガスカル諸族とアッサム諸族との特別に近い関係は出てこなかった [Obayashi　1987: 163]。これもマダガスカル諸族をアッサム諸族と一緒にまとめることに疑問を生ぜさせたが，今回の本報告において，マダガスカル諸族は，中核島嶼亜群中の亜中核区中に，マダガスカル諸族 (Tsimihety, Sakalava, Antandroy, Mahafaly, Antaisaka, Tanala) はすべて入り，したがってインドネシア諸族に伍しており，中間報告よりも適切な位置づけになっている。

こうして，区分から下のレベルになると，クラスターの位置づけは，概して本報告のほうがもっともになってくる。これは項目数の多さが威力を発揮したためと見てよかろう。

以上述べてきたことをまとめると，中間報告と本報告は，それぞれ長短があり，概して亜群から上の上位の分類においては中間報告がより成功しているように見られるのに反し，区分以下の細分においては，本報告に優れた点が多い。このことは，今後，本報告で使用したデータを使い，項目，文化双方について精選したものだけによって，分類をし直してみることも，興味深い試みになるかもしれないことを示唆しているといえよう。